【別紙様式Ⅰ】 令和7年度　学校評価報告書

学校名　厚木市立飯山小 学校

校長名　川上　美穂

厚木市教育委員会の基本目標	1　自ら学び、鍛え、未来を拓き、夢や可能性に挑み続ける力の育成 【挑戦】 2　自他の命や豊かな感性を大切にし、多様性を認めながら共に生きていく力の育成 【共生】 3　変化する社会に自ら進んで関わり、人々と協働してより良い社会を創る力の育成 【創造】

学校教育目標	学校経営の方針
心豊かに　たくましく　夢をはぐくみ 未来を拓く　主体性のある飯山の子	・地域や社会に開かれた教育課程の実現に向けたカリキュラム・マネジメントの推進 ・豊かな学力の育成に向けた主体的で対話的な深い学びのある不断の授業改善と工夫 ・児童の居場所のある安心・安全で充実した教育環境と組織づくり ・個に応じたインクルーシブ教育及び個別最適化な指導と支援体制の推進 ・開かれた学校づくりによる保護者や地域、関係機関等との連携と協働

今年度の重点目標

◇多様な体験活動での教育活動及び児童主体とした学校行事での学びの充実と人間関係の育成
◇地域等の人的、物的な教育資源や教材を利活用した「ふるさと飯山」でのさらなる教育推進
（1）【豊かな学力の伸長】（2）【調和のとれた心の育成】（3）【健やかな体と安全、地域との協働】

評価項目・指標等	基本目標との関連	具体的な取組	成果と課題	次年度への具体的な改善策
【豊かな学力の伸長】 〇どの子にも学校が楽しいと感じられる教育活動の展開 〇どの子にも知・徳・体の調和のとれた「生きる力」の育成	1・2	ルーブリック評価の蓄積システムの構築と活用	〇校内研究を通じて授業で身に付けるべき力を焦点化した評価指標を用いることで、児童が学習の見通しを持って主体的に取り組めるようになった。これにより、教職員は指導と評価の一体化を推進することができ、研究開始から2年目を経て、教師・児童双方においてその有用性や具体的な活用法への理解が着実に深まってきた。 ●単元や学年をまたいだ系統的な指導を行う上での全体的な方向性の確認や、重点の明確化など、さらなる研究の推進が必要とされる。また、これまでの研究成果を授業改善に積極的に還元していくために、ルーブリックの蓄積システムの構築が不可欠である。	・校内研究においてルーブリック活用の研究が2年目を迎え、教師と児童の双方でその有用性や活用法への理解が深まったことを受け、次年度はルーブリックを蓄積するシステムを具体的に構築する。これにより、これまでの研究成果を実際の授業改善に、より積極的に還元していくことを目指す。 ・単元や学年をまたいだ系統的な指導を行うために、学校全体での方向性の確認や、指導の重点を明確化させるなど、さらに研究を推進していく。
	1・2	自発的な学習環境の充実	〇算数プリントの自発的な利用や、新たに作成された漢字プリントの活用が児童の間で定着した。これにより、児童が自ら学習課題に取り組む姿勢が見られた。 ●漢字プリントなどの自習用教材をさらに作成・蓄積し、児童の多様な習熟度に対応できるようにする必要がある。	・ルーブリックを蓄積するシステムを構築し、研究成果を日常の授業改善に積極的に還元し、児童が見通しを持って学べる環境を強化する。 ・「飯山チャレンジ」における漢字プリントの活動を定着させるとともに、今後さらに問題を数多く作成・蓄積し、児童が主体的に取り組める教材を充実させる。
	1・2	ICT（AIドリル等）の家庭における利活用推進	〇全学年でGIGAスクール端末やデジタル教材の利用が日常化し、家庭学習での積極的な活用に向けて、保護者連絡ツールやチラシを通じた保護者への啓発を複数回実施した。 〇AIドリル（ドリルパーク、ドリルプラネット等）の有効な活用方法や、個に応じた指導・支援の手立てについて、教職員間での共有が進んだ。 ●学習用端末やAIドリルの家庭での効果的な活用について、保護者への啓発チラシの配付や情報発信（保護者連絡ツール等）を継続し、学校と家庭が連携して自学自習を促す仕組みづくりに課題が残った。 ●端末の持ち帰りルールやAIドリルの具体的な活用ポイントについて、理解を深めてもらうための情報発信を継続していく必要がある。	・学習用端末の効果的な活用方法について、保護者への啓発を継続し、学校と家庭が連携して自発的な学習を支える仕組みを整える。

	1・2	「学び合いウィーク」を通じた授業改善の積み上げ	○飯山小として取り組みたい授業づくりの視点や共有の機会を新たに加えたことで、取組をより深め、発展させることができた。 ○ 空き時間を利用して他学年の授業を見合う活動を継続し、教職員間で指導技術を学び合う機会を維持した。 ●設定された期間を全校で確実に有効活用するための事前の共通理解を徹底する必要がある。	・毎学期の「学び合いウィーク」を実施するごとに、その期間に重点を置いて取り組みたい授業づくりの具体的な視点を教員間で共通理解し、それらを単発で終わらせるのではなく、組織的に積み上げていく。
【調和のとれた心の育成】 ○児童の居場所ある安心・安全で充実した教育環境と組織づくり ○個の応じたインクルーシブ教育及び個別最適化な指導と支援体制の推進	2・3	児童主体の活動と「子どもから子どもへの発信」の継続	○児童朝会や代表委員会などの場において、児童から言葉遣いや廊下歩行などの生活目標について発信することで、子どもたち自身に課題意識が芽生え、より効果的な啓発につながった。	・「飯山小 未来へつなごうプロジェクト」などを通じて、児童が計画段階から主体的に関われる機会を増やし、自治力とリーダーシップの育成につなげる。
	2・3	縦割り活動の充実と高学年のリーダーシップ育成	○縦割り遊びが学校生活に定着し、低学年が活動を楽しむ一方で、高学年は自身の役割を意識しながら活動を計画・運営できるようになった。 ○飯山フェスティバル等の行事において、高学年が中心となる各委員会が役割を分担し、児童主体で準備を進めることができた。また、清掃活動などの場面で、高学年の児童が低学年に優しく教える姿も多く見られた。	・縦割り活動やふれあいフェスティバルといった行事において、各委員会や高学年の児童が「自分の役割」をより明確に自覚して主体的に動けるよう、指導を継続・強化する。 ・清掃活動などの場面で、上級生がさらにリーダーシップを発揮できるよう継続して指導する。また、これまでの「高学年が低学年に優しく教える姿」を認め、ほめながら伸ばしていくことで、リーダーとしての自信と意欲をさらに高める。
	2・3	「みんなの教室」を核としたインクルーシブな支援体制の深化	○週に1回の支援会議が継続的に実施され、その内容の共有が定着したことで、チームとして組織的に児童を支援する体制が構築された。 ○特定の担当者だけでなく、全教職員が支援の必要な児童に対して声掛けや手助けを行う体制を整えた。これにより、児童が安心して学習に取り組めるよう、気持ちの安定を図る成果が得られた。 ○児童の困り感や不安感に寄り添う場として「みんなの教室」の活用が進み、個に応じたインクルーシブ教育の推進が大きく図られた。	・現在定着している週1回の支援会議や情報の共有を今後も継続する。これにより、チームとして組織的に児童を理解し、一貫性のある支援を行う体制を維持する。 ・スクールカウンセラーやネットワークコーディネーター等との連携を今後も継続し、保護者への活用の促進や、相談ポストの活用などを通じて多角的な支援体制を保つ。
	2・3	人権教育による人権意識の向上	○全学年を対象とした人権意識を高める講演会を実施することができた。講師の「やってみなきゃ分からない」といった言葉が児童に浸透し、前向きな意識付けにつながった。 ○人権週間の取組を通じて、児童がそれぞれの違いを認め合い、自分自身の存在の大切さに気付くための土壌が整えらた。	・人権意識の向上を一時的なものにせず、児童会や代表委員会などを通じた「子どもから子どもへの発信」を継続し、児童同士が互いの違いを認め合い、高め合える人間関係づくりを推進する。 ・児童の自己肯定感・自尊感情が高まるような言葉掛けや支援を継続し、誰もが安心して過ごせる居場所のある学級・学校経営に努める。
【安全教育の推進】 ○健やかな体と安全、地域との協働 ○基本的な生活習慣	1・2・3	地域と連携した交通安全教育の充実	○登校班長会議での報告内容を全教職員で即座に共有し、対象児童への指導を迅速に実施したことで、年度の後半には登下校のトラブルが減少するという直接的な成果が得られた。 ○見守りボランティアや地域企業との会議を通じて課題を共有し、学校と地域が一体となって児童の安全を見守る体制が整っている。 ●今年度は登下校における課題が比較的多く見られたため、引き続きボランティアの方々と密に連絡を取り合い、情報を共有し続ける必要がある。	・新体制での登校班が始まる際などに、保護者連絡ツールを通じて保護者へ見守り協力の依頼等を送信し、より学校・家庭・地域と連携して、登下校の様子を多角的に見守る仕組みを推進する。
	1・2・3	多角的な防災・防犯訓練の実施	○火災や地震の避難経路確認に加え、あらゆる場面を想定した訓練を実施した。児童は事前・事後の指導や振り返りを通じ、自分の身の守り方について考えを深めることができた。 ○日頃の訓練の成果が発揮され、雷による引き渡しを比較的スムーズに実施できた。 ●教職員数が少ない中で、門の開錠や校内の状況確認など、有事の際に全職員が臨機応変に対応にあたる体制をさらに整える必要がある。	・全職員が臨機応変に対応できるよう、今後も「様々な状況」を具体的に想定した訓練を実施する。 ・訓練の成果を日常に繋げるため、児童が不測の事態においても「自分で考えて安全な行動がとれる」よう、日頃からの指導を継続・強化する。

○基本的な生活習慣の確立と心身の健康増進と予防・保持	1・2・3	安全点検による校内環境の整備	○毎月の安全点検を徹底することで、校内環境の継続的な維持・改善を図ることができた。 ○ドアや窓の開閉がしにくい場所の修繕や、床が剥げている箇所への修繕依頼など、具体的な危険箇所をその都度把握し、速やかに対応できている。	・日常的に危険箇所がないかを確認する点検を今後も徹底する。また、定期的に点検項目や箇所を見直しながら、確実な環境維持に努める。 ・有事の際に学校が避難所としての機能を十分に果たせるよう、計画的な施設管理と整備を継続して行う。
	1・2・3	健康教育と生活習慣（眠育）の推進	○「眠育（みんいく）」の取組や生活アンケートの活用を通じて、基本的な生活習慣の大切さを意識付けることができた。これにより、児童本人のみならず、家庭においても日頃の生活を見直す動きが増えていると評価されている。 ○冬季の「体力づくり旬間」や保護者が参観する「飯山マラソン（記録会）」の実施により、児童の健康増進と体力向上に対する強い意欲を引き出すことができた。 ●アンケートで把握した実態をもとに、基本的な生活習慣を単なる意識付けで終わらせず、日常生活の中で確実に習慣化させていくための継続的な取組が必要である。	・生活アンケートを通じて児童の基本的な生活習慣の実態を継続的に把握し、実態に即した具体的な指導や、習慣化に向けた取組へと繋げる。

今年度の学校関係者評価委員会からの意見

今年度の飯山小学校グランドデザインに基づいた各グループの取組とその成果と課題について、また学校評価で寄せられた保護者の皆様や子どもたち、そして教職員の思いについて理解し、地域として協力していくことを確認した。

具体的な学習活動については、3年生の素晴らしい発表に見られるような児童の主体的な姿が称賛されており、一度きりの機会にせず、継続的に成果を披露する場を設けることで、児童のさらなる成長につなげることが期待されている。また、地域企業の方々がゴミ拾いをする姿が児童の手本となっているように、大人の背中から学ぶ「地域全体で子どもを育てる」姿勢が成果として現れており、今後は清掃活動などを通じて「本当にこれでいいのか」と立ち止まって考える批判的な思考力を養い、将来社会で活躍するための「生きる力」を育んでいくことが共通の願いとして示された。

心の育成面では、児童の中に自他を認め合える素地が育っていることが確認され、今後も個性を尊重し、一人ひとりが守られる「居場所」のある集団づくりが求められてる。相談しやすい仕組みを構築していきながら、「普段からの相談しやすい学校の雰囲気」を大切にすることが、児童の安心感とインクルーシブ教育の充実に継続して推進していく。

学校と家庭・地域との連携においては、保護者連絡ツールによる情報発信の利便性を認めつつも、急な登校時間の変更といった緊急時には、デジタルだけでは情報が届かない層もいるという課題が指摘された。そのため、地域学校協働活動員等による直接の連絡といった伝わりづらい方々へのサポートもあったが、確実な情報伝達を行う体制の重要性が再確認されています。

総じて、保護者や地域、教職員が当事者意識を持って主体的に学校運営に関わり、子どもたちの未来を共に拓いていく姿勢を継続していくことが強く望まれた。

今年度の学校経営のまとめ　・　次年度への改善の方針

今年度の学校経営においては、「心豊かに たくましく 夢をはぐくみ 未来を拓く 主体性ある飯山の子」の育成を目指し、「豊かな学力の伸長」「調和のとれた心の育成」「健やかな体と安全、地域との協働」の3つの柱を中心に据えた教育活動を行った。

学習面では、GIGAスクール端末の日常的な活用や、学習のねらいを明確にするルーブリックの導入により、児童が自ら見通しを持って学ぶ姿が見られるようになり、指導と評価の一体化が着実に進んだ。心の育成においては、誰にとっても安心・安全で居場所のあるインクルーシブ教育を推進し、全教職員がチームとして児童の情報や困り感を共有し、組織的に支援する体制が構築した。また、縦割り活動の充実や飯山フェスティバルといった行事を通じて、高学年が自らの役割を自覚して下級生をリードする場面が増え、学校全体の自治意識が高まった。安全面では、地域ボランティアや企業との緊密な連携による登下校の見守りや、多様な状況を想定した防災訓練、さらには「眠育」を通じた生活習慣の意識付けなど、地域とともに児童の命と健康を守る土壌がより強固なものとなった。

次年度に向けた改善の方針としては、これらの成果を基盤としつつ、さらに児童が「自分事」として主体的に活動を展開できる仕組みづくりを重視していく。具体的には、「飯山小 未来へつなごうプロジェクト」やカヌー体験などの地域素材を活かした学習において、計画段階から児童がより深く関われるよう支援し、自尊感情とリーダーシップをさらに伸長させていく。学習指導では、蓄積されたルーブリックを積極的に活用して個別最適な学びを深化させるとともに、家庭との連携を強化し自主学習のさらなる定着を目指す。こうした取組を通じ、保護者や地域とともに全教職員が当事者意識を持って主体的に学校運営に参画し、「ふるさと飯山」への誇りを胸に、よく考え正しく判断して変化する社会をしなやかに生き抜く子どもたちの育成を目指していく。